

2025年度

国語科

初芝橋本高等学校A

〔注 意〕

- ①所持品は椅子の下に整頓^{せいとん}しなさい。(机の中には何も入れてはいけません)
- ②チャイムの鳴り始めが「始め」、「終わり」の合図です。
- ③問題用紙は合図があるまで開いてはいけません。
- ④試験開始後、受験番号・氏名を記入しなさい。
- ⑤問題・解答用紙に不審な点があれば黙って手を挙げなさい。
- ⑥解答が終わっても試験終了時間まで退出できません。
- ⑦試験中、体調不良などで連絡のあるときは黙って手を挙げなさい。
- ⑧冊子の裏側にも注意事項があるので読んでおきなさい。

受験番号	
氏 名	

問題中の字数制限は、すべて句読点、記号等をふくみます。

一 各——について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直
しなさい。

- (1) 新人候補をヨウリツする。
- (2) 人の作品をモホウする。
- (3) 入場規制がカンワされた。
- (4) スイテキが花についている。
- (5) 心のうちを吐露する。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「学ぶ」とか「学び」とかいうことばが最近よく使われる。これは教育学という学問のなかで、これまでのように教える側を中心に教育という営みを考えるのをやめて、学んでいる側に視点を置いて考えてみようという主張が強くなってきたためだ。

私たちは「教育」ということばをあたりまえのように使っている。

【A】このことばは、最初に「教える」という漢字がきてその後「育つ」という漢字がくるという構造になっていて、まるで「教

育」なる営みは、誰かが誰かにまず「教え」なければ成立しないというような感覚——それは錯覚といってよいものだが——を人に与えてしまうという性格をもっている。——(ア)

しかし、違うだろう、というのだ。「教育」ということばは教えることに重点を置いたことばだが、学ぶ側からすると、よい学びができたかどうかのほうがつつと大事なのだ。現実の学校などでは、教える側が学ぶほうに合わせるのではなく、学ぶ側が教えるほうに合わせさせられているようなことがよくある。これは本

末①ではないか。教えるというのは、むしろ学ぶという行為を上手に支える営みであり、大事なのはあくまでも、学ぶ側が②どれほど深いよい学びができているかということではないか、というのだ。言ってみれば、「教育」といわれている営みの重点を

「学ぶ」ほうに移して発想してみよう、ということだ。——(イ)

しかし、ことばというのは奇妙なもので、ふだん何気なく使っているときは別にその意味を気にしないのに、そのことばがなにやらキーワードもどきになると、とたんに、ちよつと待てよ、このことばは改めて考えるとどういう意味なんだ、という疑問をもつようになる。「学ぶ」ということばもそうで、こんなことばの意味など分かりきっている気がするけれども、いざ自分できちんと説明してみろといわれるとどうも明確にはできない、ということになりがちだ。

ということ、改めて聞いてみる。「学ぶ」って、いったいどういう意味だ？

ものごとの意味がよく分からないときには、そのことが起こるごく単純な事態を想定して考えてみるのがヒントになることがあ

る。ここではこのやり方をあてはめてみよう。

赤ん坊を頭に思い浮かべてみてほしい。ようやく歩き出した頃だから、満一歳過ぎぐらいの子としよう。あるときおばあちゃんの家にはママやパパと出かけた。この子は、生後しばらくこの家にいたことはあるのだが、そのときの記憶はおそらくないから

③にはじめて訪れた家になる。しばらく、この赤ん坊になつたつもりで、この子の経験することを考えてみてほしい。

この子はたぶん、家のなかをうろちよろするだろう。【B】、自分の家とずいぶん違うということにすぐ気がつくに違いない。生活の習慣も、今まではまったく違っている。きつととまどったことがいっぱいある。たとえばご飯を食べるとき、自分のうちではパパとママはテーブルで椅子に腰掛けて食べているのに、おばあちゃんの家では低い大きな座卓にみんなで輪になって座って食べる。こんな風景ははじめてみるものだ。

お風呂も全然違っている。木の浴槽で、くらしい感じがして少し怖かっただろうと思う。この家には猫がいて、すぐ足下によってくるといふ体験もはじめてだ。もちろん本物の猫は見たことがなく、何だろうと思つて近づいたら、急にはげしく動いたのでびっくりした。それから怖くなって近づかなくなった。

こうした体験を、この子は短い期間にたくさんするだろう。ここでこの子は、じつに多くのことを「学んで」いることが分かる。食事というのは高いテーブルがあつて椅子に座って食べるものだという「知識」を、この子はすでに持っていたはずだ。この子の家ではそれしかなかったのだから。ところがそれとはまったく異なる風景を見せられる。しばらくすると、おそらくこの子は自分

の「知識」を修正せざるをえなくなるだろう。食事は椅子だけでなく床に座って食べることもある。こういう「知識」をこの子は付け加えざるをえなくなる。風呂についても同じ。猫をはじめて見たのだが、そのときの体験で、猫は怖い動物だという「知識」をつくりあげた可能性がある。

(ウ)

このように、新しく体験したことがそれまでの自分の「知識」と矛盾するような場合、あるいは体験がなくてその事態や物事についての「知識」がない場合、人は新しい体験とそれまでの「知識」が矛盾しなくてすむように、自分の「知識」のほうを修正して④両者を両立させるような新たな「知識」をつくりあげたり、新しい体験を自分なりに納得のいく新しい「知識」につくりあげたりする。これは「知識」が高次に変容したこと、あるいは新たな「知識」が創造されたことを意味している。

こうしたプロセス、【C】、なんらかの体験をしたときに、その体験を理解し了解できるように、それまで持っていた自分の「知識」を修正し、その体験をも含めて理解できるように発展させて新たな「知識」をつくりあげたり、未知のことを体験し、その体験を何らかのかたちで総括し、教訓を導いて、自分なりに納得のいく「知識」をつくりだしたりすること、これを「学ぶ」といつているのだ。名詞形が「学び」。簡単に言うと、「学び」とは体験から何らかの新しい「知識」を導き出す心身の営みのことを言う。

(エ)

「学び」のプロセスは、何らかの感情の動きを伴っている。たとえば、新しい事態を以前の「知識」で理解できないでいたときに誰かから説明を受け、なるほどそうだったのかと納得し、それを

取り込んで新しい「知識」を自分の中につくるとき、その人は（小さな）感動という感情を体験するはずだ。自分で調べて発見して納得し、新しい「知識」を自分でつくりあげるときも、感情の大きな動きを体験する。やったあ！というのに似た感情だ。だから「学び」というのは、静的で冷たい心の働きではなく、動的で情的な、人間にとってとてもうれしい営みになるはずだ。

こう考えると、私たちは日常、たえず「学び」を経験していることがわかる。ちょっとした体験から、私たちは「こういう場合は〇〇したら失敗する」というような「知識」を日頃勝手に導き出したりしているからだ。こうした場合でも「学び」がおこなわれていることになる。ただ、「学び」にはある種の感動がともなうものであるということをおまえると、同じ「学び」にも浅い深いがあると考えたほうが適切だろう。

「学び」が深いほど、感動が大きい。あるいは、「学び」が深ければ深いほど、心身に新しいものが付け加わる度合いが大きく、行動までもがそれによって変化することがある、ということだ。

「学び」の意味をこのように考えてくると、そこに必ずしも「教え」ということが必要とは限らないということが理解されるだろう。もちろん、「教え」が深い「学び」を誘発することはあるし、そうした「教え」を私たちは期待しているのだが、「学び」にとつて「教え」が絶対条件でないということを確認しておくことは大切なことだ。

（汐見稔幸「『学び』の場はどこにあるのか」）

問一 【A】～【C】に当てはまる語としてそれぞれ最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ すると ウ けれども

問二 ① に当てはまる二字の熟語を答えなさい。

問三 ② 「どれほどいるか」とあるが、「深いよい学び」とはどのような学びか、本文中の語句を用いて四十字以内で説明しなさい。

問四 ③ に当てはまる語として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一般的 イ 意図的
ウ 実質的 エ 具体的

問五 ④ 「両者」が指す部分を本文中から十五字で抜き出し、始めと終わりの三字を答えなさい。

問六 次の文章は本文中の(ア)～(エ)のどの部分に当てはめるのが最も適当か、記号で答えなさい。

こうした機運が高まって、これまでのように安易に「教育」ということばを使うのではなくて、「学ぶ」とか「学び」とかを使うほうがよいという雰囲気ができあがり、「生徒の学びを保証しよう」などという言い方はやりだした。

問七 本文の内容として適当なものにはA、適当でないものにはBを、それぞれ解答欄に記入しなさい。

ア 教える側が、学ぶ側の姿勢が整うように働きかけることが教育の本質だ。
イ 何かを学ぶためには知識があらかじめ頭の中に入っている必要がある。
ウ 「学ぶ」ことには感動が関係しており、「学び」の深さと感動の大きさは比例している。
エ 「教え」が「学び」には不可欠だと考えがちだが、必須というわけではない。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

その手紙の宛名は客室係御中だったから、忘れものの問い合わせだろうかと思いつつ客室係主任の中俣律江は封を開いた。
①達筆な字で、昨年に老母と宿泊をした者です、とまず書かれている。その節は車椅子の宿泊客を面倒がらずにもてなしてくださって、母ともども感激いたしました、と続く。はて、車椅子のお客さまなんていたかしら、と首をかしげつつ、律江は読み進める。②ずいぶん長い手紙である。

九十六歳になる母が上高地に旅行をしたいと言いつつ出したときはきょうだい全員で反対した。車椅子での移動は不自由だし、途中からはマイカー規制でバスかタクシーに乗らなくてはならない、運転手にも乗客にも車椅子では③ことごとく迷惑を掛ける、いやそればかりでなく、旅先で母自身に何かあったら……と心配は尽きないからだ。しかし老母は頑固にいくと言いつける。上高地にいけないのだったら死ぬに死ねない、とまで言う。上高地は、今は亡き私たちの父親が定年を迎えた年から、夫婦で毎年訪れていたところなので、ア「いける」ときに再訪したい母の気持ちもわかる。そうして私たちきょうだいは、自分の子どもたちの手まで借りて、母の希望をかなえることを決意した次第です……、とうつくしい文字は綴る。

昨年秋、紅葉のもっともうつくしうしきに、母の念願どおり、このホテルに宿泊することができた。父が亡くなってから十五年ぶりに見る暖炉の火に母は感激し、あいかわらず素晴らしいフランス料理に舌鼓を打っていた。以前のように付近を散策す

することはかなわなかったけれど、窓から見える山々の姿に、朝も暮れも母は見入っていた。

宿泊した日は素晴らしい夕景で、雪を戴いた山の頂がしずかに燃えさかっているようだった。それを見ていた母親が、おとうちゃんと呼んでいる、と言う。ああよかった、ここに来たらおとうちゃんに会えると思っていた、いつまでも呼びにきてくれないからどうしようかと思っていた、と母は真顔で言う。縁起でもないことを言うなど咎めたけれど、本当にその光景は、神さまが降りてくるような神々しさだったから、イ母は亡き夫の幻でも見た気になったのだろう。

その旅から帰って、しばらくは変わりなく過ごしていた母だが、年号が変わるのを待たずに亡くなった。夢を見て笑っているみたいなしずかな最期だった。

手紙はまだ終わらない。そしてその先を読んで律江は、この話は事実ではない、と思った。ウ手紙のぬしは昨年秋にこのホテルを訪れてはいない。昨年に車椅子の宿泊客がいた覚えがない、というだけの理由ではない。その先を読んで、④手紙のぬしがなぜ手紙を書いたのか、律江には、わがことのように理解できたからである。手紙のぬしはこう続けている。

晩年、手のかかる母の面倒を満足にみられず、思うように付き添ってあげられず、ときには声を荒らげたことも、無視をしてしまったこともあった。母が生きているときから、罪悪感でいっぱいだった。母が死んだあとは、私はさぞや後悔の念に苦しみ⑤られるだろうと思っていた。そしてまた、私にとっては七十年近く、母親がいることが当たり前前の生活で、母親が死ぬということがお

そろしかった。いなくなってしまうことにたえられない気がしていた。

あのとき、あのすごい夕焼けの前に「おとうちゃんが呼んでいる」と母親が言ったとき、どういうわけだか後悔も恐怖も不安も、私のなかからぜんぶ消えた、何かそれこそ昇天するようにふっと消えた。こうしかできなかつたけれど、私もきょうだいもそれぞれのせいっぱいやって、母もそのことをわかっている。エ催眠術にかかったみたいなのに、ずっとそう思った。それで私もまた、母の死を安らかにしずかに見守ることができた。——と手紙のぬしは書き、ていねいなお礼の言葉が書き連ねてあった。この話は事実ではないと律江が思ったのは、「書きすぎている」からでもあった。⑥客室係を相手に、手紙の書き手は、書きすぎている。おそらく書かずにはいらなかったのだ、老いた母を安らかに見送ることができたという、彼女自身の真実を、事実を曲げてしか伝えられない真実を。

昨年ではなくいつか遠い昔、母と娘は、あるいは両親と子どもたち、もしかしたら両親と娘家族かもしれないが、ともかく手紙のぬしとその母はこのホテルに宿泊した。そしてきつと、心に刻まれるようなうつくしい夕景を見たのだろう。大往生の母親は、死ぬ間際に本当にその夕景を思い出したのかもしれない、夫が呼んでいるとうわごとのように言ったのかもしれない。手紙のぬしは、今際のきわに母親が見た幻影を、いっしょに見たのに違いはない。そうして本当に、ずっと自分をさいなんでいた感と恐怖を、そのとき手放すことができたのだ。昨年秋にこのホテルに泊まったかどうかという事実関係などどうでもいい、とにかくだ

れかに、その彼女だけの真実を伝えたかった……。

律江がそこまで深読みしてしまうのは、⑦律江自身がそうだったからだ。律江の母親は、七十五歳のとき転んでけがをしたのがきっかけで、みずから望んで介護マンションに入った。八十歳で母が命をまっとうするまで、律江はずっと葛藤し続けていた。母親のそばにいない方がいいのか。いや、そばにいて何ができる、とか。専門スタッフのほうがよく優秀だ。オ母自身が望んだことじゃないか。でも……。葛藤は尽きなかった。しかし、最後に母親を訪ねたとき、買っていったプリンを母親が「おいしい」と言い、「パーラーすみれのプリンね」とつぶやいたとき、律江はなぜか「許された」と感じた。パーラーすみれなんて店を律江は知らないが、でもきつと、八十年生きた母の記憶の底に沈^{ちん}澱している店だろう。数百円のプリンで、そのうつくしい場所に母親を連れていけた、それだけで、自分は許された、と感じたのだった。だれに、かも、何から、かもわからない、ともかく、もう葛藤に苦しめられなくていいのだと悟った。もしパーラーすみれという店が今も現存していたら、律江も手紙を書いたかもしれない。事実ではないことを書いて、真実を伝えようとしたかもしれない。数枚に及ぶ便せんを折りたたみ、封筒に戻して律江はうつすらと微笑む。

休憩の終了時間を確認し、スタッフルームを出る。通り過ぎざま、窓の外に目をやると、連なる山々が夕日に包まれて、みごとなだいだい色に染まっている。廊下のずっと先に、律江は母と娘の姿を見る。ぴったり寄り添って圧倒されたように外の景色を見つめている、仲睦まじい母と娘の姿は、だいだい色に溶けていくようにずっと消え、律江の心にもいつまでも残像を残す。

（角田光代「彼女の真実」）

問一

①「達筆」・③「ことごとく」の意味としてそれぞれ最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

①

ア じょうずな字
イ 太く元気のよい字
ウ 太きさのそろっている字
エ 細かくていいねいな字

③

ア とにかく
イ 大部分
ウ もちろん
エ すべて

問二

②「ずいぶん長い手紙である」とあるが、続く五ヶ所の「――ア」のうち、この「長い手紙」に含まれないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア いけるときに再訪したい母の気持ちもわかる。
イ 母は亡き夫の幻でも見た気になったのだろう。
ウ 手紙のぬしは昨年秋にこのホテルを訪れてはいない。
エ 催眠術にかかったみたい、すんとそう思った。
オ 母自身が望んだことじゃないか。

問三 ——— ④「手紙のぬしがなぜ手紙を書いたのか」とあるが、

その理由に当たる部分を、「」から。」へ続く形で、本文中から二十五字以内で抜き出し、始めと終わりの三字を答えなさい。

問四 ——— ⑤「られ」と同じ用法のものを次から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア その水路は跳び越えら^レれるほどに幅が狭い。
イ 春になると故郷の桜が思い浮かべ^レられる。
ウ ゴール間際で後ろの選手にとらえ^レられた。
エ コーヒーに砂糖をいくつ入^レられますか。

問五 ——— ⑥「客室係を相手に、手紙の書き手は、書きすぎ

ている。」とはどういうことか、その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ホテルのスタッフに対して、ホテルのできごと以外のことまで述べている。
イ 相手は仕事の上で接しただけなのに、個人的な事情を述べすぎている。
ウ 仕事上の間柄なのに、まるで友人のように接しすぎている。
エ 忘れものを預かるだけの係の人に、それ以外のことまで頼みすぎている。

問六 に当てはまる二字の熟語を、本文中から抜き出して

答えなさい。

問七 ——— ⑦「律江自身がそうだった」というのは、どうい

うことか。四十五字以内で説明しなさい。

四 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

昔、^{注1}天竺の人、宝を買はんとために、^{注2}銭五十貫を①子に持たせてやる。大きな川の間を行くに、舟に乗りたる人あり。舟の方を見やれば、舟より亀、首をさし出したり。銭持たる人立ち止まりて、この亀をば、「^{注3}何の料ぞ^{れう}」と問へば、「殺して物にせんとする」と②いふ。「③その亀買はん」といへば、この舟の人曰く、いみじき大切な事ありて設けたる亀なれば、いみじき価なりとも④売るまじき由をいへば、⑤なほあながちに手を摺^すりて、この五十貫の銭にて亀を買ひ取りて⑥放ちつ。

心に思ふやう、親の、宝買ひに隣の国へやりつる銭を、亀にかへてやみぬれば、親、いかに腹立ち給はんずらん。さりとてまた、親のもとへ行かであるべきにあらねば、親のもとへ帰り行くに、道に人のゐて⑦いふやう、「ここに亀売りつる人は、この下の渡りにて舟うち返して死ぬ」と語るを聞きて、親の家に帰り行きて、銭は亀にかへつる由語らんと思ふ程に、親のいふやう、「何とてこの銭を

ば返しおこせたるぞ」と問へば、子のいふ、「^⑧さる事なし。その
錢にては、しかじか亀にかへてゆるしつれば、その由を申さんと
て参りつるなり」といへば、親のいふやう、「黒き衣きたる人、
同じやうなるが五人、おのおの十貫づつ持ちて来たりつる。これ、
そなる。」とて見せければ、この錢いまだ濡れながらあり。

はや、買ひて放しつる亀の、その錢川に落ち入るを見て、取り
持ちて、親のもとに子の帰らぬさきにやりけるなり。

〔宇治拾遺物語〕

注1 天竺…インドのこと。

注2 錢五十貫…「貫」は錢貨の単位。錢五十貫で五千兩。

注3 何の料ぞ…どうするのか。

問一 ——— ⑤「なほ」・⑦「いふやう」を、現代仮名遣いに改
めなさい。平仮名で答えること。

問二 ——— ①「子」と同一人物を表す語句を本文中から抜き
出して答えなさい。

問三 ——— ②「いふ」・⑥「放ちつ」の主語は誰か、それぞれ
最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 子 イ 親 ウ 亀 エ 舟に乗りたる人

問四

——— ③「その亀買はん」・④「売るまじき」の現代語
訳としてそれぞれ最も適当なものを次から選び、記号で答
えなさい。

③

ア その亀は買えません
イ その亀を買いました
ウ その亀を買いません
エ その亀を買ったのですか

④

ア 売るつもりはない
イ 売ってはいけない
ウ 売ってほしい
エ 売りましょう

問五

——— ⑧「さる事なし」とはどういうことか、その説
明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 亀が生きているはずはないということ。
イ 宝が手に入るはずはないということ。
ウ 錢が手元に戻るはずはないということ。
エ 舟が転覆するはずはないということ。

二〇二五年度 初芝橋本高等学校 入学試験
国語科 解答用紙 (A日程)

氏名

受験番号

		0	0	0	0	0	0	0	0
		1	1	1	1	1	1	1	1
		2	2	2	2	2	2	2	2
		3	3	3	3	3	3	3	3
		4	4	4	4	4	4	4	4
		5	5	5	5	5	5	5	5
		6	6	6	6	6	6	6	6
		7	7	7	7	7	7	7	7
		8	8	8	8	8	8	8	8
		9	9	9	9	9	9	9	9

得点 (記入しないこと)

一 (1) 擁立 (2) 模倣 (3) 緩和 (4) 水滴 (5) とろ

2点×5

二 問一 A ウ B イ C ア 2点×3 問二 転倒 3点

問三 心に新しいものが付
け加わる度合いが大き
く、行動までも変化す
るような学び。

7点

問四 3点 問五 新しい知識 4点 問六 イ 4点

問七 ア B イ B ウ A エ A 2点×4

三 問一 ① ③ エ 3点×2 問二 ウ オ 3点×2 問三 とにか かつた から。 4点

問四 ウ 4点 問五 イ 4点 問六 罪悪 4点

問七 老いた母の世話が十分にで
きたか葛藤し続けていたが
、最後に安らかに見送るこ
とができなかったこと。

7点

四 問一 ⑤ なお ⑦ いうよう 2点×2 問二 銭持ちたる人 3点

問三 ② エ ⑥ ア 2点×2 問四 ③ イ ④ ア 3点×2 問五 ウ 3点